

CAP

NA

キャプナニュースレター-60号

桜が一段と鮮やかだったこの春。まっさらなランドセルの子どもたちの姿が、満開の桜によく似合いました。

解散含みの政局は混迷し、選挙対策のばらまきのような政策ばかりが目につく昨今。未来を担う子どもたちを、温かくどっしりと見守れる社会であってほしいと願います。

Vol. 60

☆イオン幸せの黄色いレシートキャンペーン☆

イオンでお買い物されたみなさんありがとうございます！！

毎月11日にお買い上げのレシート金額の1%分を商品に代えて、ボランティア団体に寄付されるイオンのイエローレシートキャンペーン。消耗品の寄付は本当にありがたいです。イエローレシートキャンペーンでは、店内のレジのそばなどでお客様に「イエローレシートをCAPNAのBOXに入れてください」とお願いし、ホットラインのカードをお渡ししています。CAPNAへの質問があったときは、リーフレットをお渡ししながら、子ども虐待防止についてお話しさせていただいています。いろいろな立場の方が集まるショッピングセンターで、児童虐待について広報するいい機会だと思います。こんな形で、社会貢献をしているイオンのみなさまに感謝申し上げます。

今回の贈呈品一覧*ナゴヤドーム前¥37,100 事務用品、給湯用品など*ワンダーシティ¥8,300 コーヒー、茶葉、洗剤など*瀬戸みずの¥9,800 コピー用紙*守山¥14,700 ペットボトルお茶*木曾川¥9,600 コピー用紙*高橋¥44,100 PC周辺消耗分*豊田¥7,100 PC周辺消耗品

総会のお知らせ…会場が、いつもと違います！！

5月31日(日)13時30分から名古屋市女性会館です。

* 議案書・委任状等を同封しております。ご覧ください。

「CAPNAの未来を考えるワークショップ」に参加してご意見をお寄せください。

ご寄付 次の皆様からご寄付をいただきました。お礼申し上げます。

(1月17日-3月30日分、順不同、敬称略)

【個人】 飯沼敏子、安中智津子、野田正文、榎本和、内藤修、國森佳子、五十嵐ベティ、井階弥可、長田恭子、水無瀬量瑞、小島千恵子、加藤文子、田島美恵子、中田照子、平野陽子、木村剛、嶋康子、正木史子、小島了順、山口喜美代、水野正三郎、佐伯誠、岡本洋子、後藤宗理、山田裕子、谷口紀美江、吉田衣里、堀内久美子、北原和子、中尾美紗子、関厚子、柳川佳延、杉浦宇子、今西信代、村瀬すみ江、森川信子、石田金司、服部高子、水野尚美、向山富雄、山根香代子、齋谷知恵、堀内久美子、神田直子、鷹見直子、日比野元子、パブリックソースセンター、小川律子、水野タズ子

【団体】 MEITO CHRIST INTERNATIONAL、名古屋 SORA ゾンタクラブ、いぶき保育園、
匿名7名

【ボランティア募金】

電話相談員必須研修会場にて、学校と地域の発達支援研究会、柳川佳延、堀内久美子、
碧南市役所要保護児童対策協議会

匿名1名

CAPNAニュースレター-60号 (隔月刊44号)

2009年4月24日発行

発行 特定非営利活動法人 子どもの虐待防止ネットワーク・あいち

編集 CAPNA事務局広報チーム

印刷 社会福祉法人名古屋ライトハウス光和寮

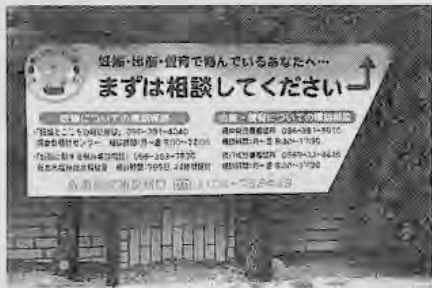
事務局 〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-4-404 TEL052(232)2880、FAX052(232)2882

広げたい！「命のゆりかご」

熊本・慈恵病院の取り組みから

2月21日、名古屋市女性会館で「『こうのとりのゆりかご』を支援する市民のつどい」が開かれ、慈恵病院（熊本市）の田尻由貴子看護部長が講演しました。「赤ちゃんポスト」という通称ばかりが有名になり、一時は「子捨てを助長する」などと批判も浴びましたが、子どもの命を守り、母親の支えになろうとする医療者たちの真摯な活動です。昨年暮れ、慈恵病院を訪ねる機会がありました。田尻さんのお話と合わせて紹介します。（安藤明夫）

高台にある慈恵病院の正面に立つと、「まずは相談してください」の看板が目を引きます。妊娠・出産・養育で悩む人たちのために、相談電話などの社会資源が列記してあります。



「赤ちゃんを預けるのは最終手段。相談してもらうことが活動の目的です。赤ちゃんを連れてきて、私たちと話す中で、もう一度育てようと思直したお母さんもいます」と田尻部長。

看板の矢印に従って進むと、乳児を抱いた聖母マリアの壁画のわきに「こうのとりのゆりかご」の扉。その脇にインターホンと相談電話番号の一覧があります。

明治時代に宣教師によって建てられた同病院では、設立当初から、ハンセン病患者を支援したり、お寺に捨てられる乳児のための施設を作るなど、弱者の支援に力を注いできました。

その伝統は医師や看護師たちに熱く受け継がれています。蓮田太二理事長が産婦人科医だったこともあって、産婦人科のスタッフは特に熱心で、妊婦の不安に応じる「妊娠かっとう外来」、出産後の母子の家庭訪問、小中学校での「命と性の教育」とさまざまな社会活動が行われてきました。

蓮田理事長は、ドイツで2000年から始まった「ベビークラブ」に関心を持ち、2004年に視察。ドイツ全土の70カ所に設置され、年間40人ほどの赤ちゃんが助けられていることを知り、日本での実現を目指して行政と交渉してきました。2005年に熊本県内で赤ちゃんが亡くなる遺棄事件が3件起きたことも、設置への情熱をかきたてました。

もともと「忙しすぎて、立ったまま眠っている」と評されるほどの献身的な医療者で、地元の信望も厚い人だっただけに、熊本県や熊本市も耳を傾け、「預けられる赤ちゃんの安全確保、相談機能の強化、公的機関との連携」の条件を付け、設置を認めました。

初年度（昨年3月末まで）は、17人の乳幼児が預けられました。大半は生後間もない赤ちゃんで、母親のつらい思いをつづった手紙が添えられた例も13件あったそうです。

出産直後の大変な体調の中、必死の思いで病院までやってきて、わが子を託す親たちの姿は「安易な子捨て」という批判がいかにも的外れなものかを物語っています。

赤ちゃんが預けられると、病院が児童相談所や警察に連絡。母親の名前が分からない場合は「棄児」として市が戸籍を作成し、乳児院などに預けられることになります。

ゆりかごの扉が開けられると、ブザーが鳴り、当直の医師、看護師らがすぐに駆けつける態勢になっています。いつ赤ちゃんが預けられても、命の安全を確保しなければならない。その重圧、緊張は大変なものです。地域医療崩壊の時代の中、13人の医師、92人の看護師たちはほとんど辞めていかないとか。地域貢献の活動に医療者たちが手応えを感じ、高い使命感を抱いていることが伝わってきました。

そして田尻部長ら幹部は、より大変な仕事を強いられます。

病院のフリーダイヤルに全国から寄せられる相談電話が、初年度は501件に達しました。

24時間対応のフリーダイヤルで、田尻さんと外来師長、病棟師長の三人が交代で担当しています。仕事の合間も携帯電話で相談を受け、夜寝るときも枕元に置きます。そして深夜のコールに受話器を取ると、10代の少女から「いま、赤ちゃんを産みました。自宅で両親は寝ていて何も知りません」といった緊急相談だったりします。

うるたえたりすると不安が相手に伝わり電話を切ってしまうので、冷静に状況を把握し「まず毛布で暖めて。そしてすぐにお母さんを起こして、救急車を呼んで」と指示しなければなりません。二年目にあたる昨年度のデータはまだ発表されていませんが、深夜の相談の割合は一年目より高くなっているそうです。

名古屋での「市民のつどい」には、岩城正光・前理事長ら多くのCAPNAメンバーと、愛知県内などの里親たちも出席しました。0歳児からの里親委託を積極的に進めている愛知県の取り組みについての報告もありました。

少子化対策が声高に叫ばれる一方で、望まない妊娠から中絶手術を選ぶ女性が膨大な数にのぼっています。そして新生児の遺棄致死も絶えません。どんな「支援」が必要なのかを突き詰めていけば、不安や混乱の中にいる人が安心できる相談機能と、最終手段としての「赤ちゃん預け」。

慈恵病院の活動はとても納得できるものでした。

そして、こうした取り組みをできる機関が、全国でもここだけという現状が、日本の母子支援の難しさを物語っているように思いました。



名古屋市虐待防止研修会

「気になる子どもと親へのかかわり ～発達障害と虐待～」

児童精神科医 田中康雄氏の講演を聞いて

わたしたち電話相談員にとっても、発達に問題をかかえた子をもつ親からの相談は、最近の課題としてうかがいがっています。また発達障害をもつと思われる青少年や成人の犯罪が社会的にも注目される昨今、時宜にかなったお話をうかがうことができました。

学習障害、注意欠陥多動性障害、広汎性発達障害などの診断名は、共通理解のためのレッテルともいえるもので、生活することの困難さを抱えている子が生き抜いていくためにどう手をさしのべるかという主旨でした。

また虐待が発達に与える影響として、免疫力の低下、運動・言語・認知力の遅れ、不注意・多動性、社交力の欠如、愛着性障害などがあげられます。虐待を受けた子どものうち、なんらかの発達障害が考えられる事例も少なくないといわれています。

子どもは自分が思うようにいかないこと、周囲から期待されていることがかなわないことに困っているという指摘もありました。

虐待やネグレクトと発達障害に関心を持つことは、原因探しや診断をただ付けることに固執することなく、親にある子育ての大変さや孤立感、子どもにある自己評価の低さやどうしようもない理不尽さへの思いに、周囲がいかに関与するかということが問われます。

「やれることをやりましょう」と言い残されたのが印象的でした。

(理事 隈元)

名城ローターアクトクラブのチャリティー活動に参加しました。

今年も(2009. 3. 8)名古屋名城ローターアクトクラブの例会・世界ローターアクト週間名古屋分区分合同活動「世界ローターアクトデー・チャリティー活動」に参加させていただきました。このクラブからはCAPNAの趣旨にご賛同いただいて、長年にわたりご寄付をいただいています。理事の白石と事務局スタッフの一柳が参加しました。

会場の星が丘テラスは、星が丘三越の東側の通り沿いにオシャレなお店がいっぱい並んでいます。名古屋の表参道ヒルズでしょうか……。その途中の広場で子どもたちが遊ぶスペースを作り、折り紙・トランプ・バルーンなど、ローターアクトクラブのメンバーと夢中で遊んでいる様子を若いおとうさんおかあさんがホッと見守るまなざし。そのようすを見守る通りがかりの大人たちのまなざし。広場全体がホットな空気に包まれたようでした。

社会の中で、子どもたちが育つのだなあと思った1日でした。当日は、CAPNAリーフレットとホットラインカードを配布し、地域で見守ってほしいという思いをこめてローターアクトクラブ、ローターアクトクラブのみなさんには本当に感謝を申し上げます。



団体賛助会員、企業賛助団体のご紹介

いつも、CAPNA を応援してくださっている団体、企業さまからのコメントをいただきました。

<p>名古屋 SORA ゾントクラブ (社会奉仕団体)</p>	<p>虐待が増え続ける反面、公的な支援が少ない現状の中、CAPNA の活動は必要不可欠の存在である。私たちのクラブはより地域でできることを中心に地道な支援活動を続けている。CAPNA だけに任せるのではなく、「底辺」の活動の輪を広げ、将来的には公的な支援活動が推進されるように願い、重要な橋渡し支援に力を注いでいきたい。</p>
<p>株式会社サンゲツ (インテリア商品の開発販売)</p>	<p>良い言葉が良い考えをつくり、良い人生を実現していきます。誰もが幸せになれるよう、愛と感謝と希望に満ちたすばらしい人生を実現されますよう願っています。・・・佐藤富雄著「自分を変える魔法の口ぐせ」より</p>
<p>名古屋 CAP (子どもへの暴力防止プログラム)</p>	<p>私たちは、「子どもが暴力から自分を守るために」をテーマとしたCAPのワークショップを愛知県内の小学校などに届けさせて頂いています。一人でも多くの子どもが、そして私たちおとなも「安心して自身をもって自由に」生きられることを願って活動しております。</p>
<p>リゾートトラスト株式会社 (会員制リゾートホテルの運営・開発・会員権の発売、ホテル・レストラン・ゴルフ場の運営業務、メディカル事業等)</p>	<p>子どもの心と身体の成長に深刻な影響を与える虐待は、早い対応が要されながらも発見が難しい問題であると存じます。子どもたちに向けた「気持ちを語ろう」プログラムや保護者向けの電話相談のほか、多岐にわたる虐待防止への取り組みに賛同すると共に、子どもへの虐待がなくなることを願っています。</p>
<p>名古屋養 ロータークラブ (社会奉仕団体)</p>	<p>社会から子どもへの虐待が、撲滅されることを願います。</p>
<p>社会福祉法人昭徳会 名古屋養育院 (児童養護施設)</p>	<p>多くの被虐待児を養育している中で、虐待の当事者や育児に不安を抱えている家族を支援する目的で、電話相談も行っています。今後も施設の機能と役割を通じて虐待問題に取り組んでいきたいと思っております。そのためにも今後もCAPNAをはじめ様々な立場の人々と協力関係を築いていきたいと願っております。</p>
<p>日本アプソリュートヒーリング協会 (教育、リラクゼーション、ベビーマッサージ教室)</p>	<p>虐待とは、親の心身のストレス、金銭問題、アルコール、社会不安など様々な要因が絡み合って、発生しています。企業の本来的なべき姿は、「社会貢献」です。各企業が子どもたちを救ってゆく体制を造り未来を担う尊い命を守ってゆく役割があります。更に親へのメンタルケアを各企業、団体、行政などが、力を入れてゆくべきです。「自分のところとは関係ない」という思いの方がまだまだ多い現代、CAPNA のご活躍を心より期待し、精一杯応援させていただきます。</p>

☆それぞれのお立場からの社会へのメッセージありがとうございます。あらためて、私たちががんばっていきたくて思っております。引き続きご支援、ご協力よろしく願いいたします。

CAPNA市民講座09

上映終了後は、涙で頬を濡らした人たちがあちこちに・・・

映画と 対談

日時 平成 21 年 3 月 7 日 (土)
会場 ウィルあいち
映画 「青い鳥」
(原作 重松清、主演 阿部寛)
対談 折出健二さん (愛知教育大学副学長)
杉浦宇子さん (弁護士)



映画について

この映画はまだ数ヶ月前に封切られたばかりのホヤホヤの映画です。第 63 回毎日映画コンクール男優主演賞をいただいたという嬉しい知らせが入って、私たち CAPNA のこの映画に対する広報も一段と熱が入りました。主演の阿部寛さん以外は有名人が少ない地味な作品ですが、佳作と呼ぶにふさわしい、静かな感動に包まれる仕上がりになっています。また、主人公は吃音の障がいを持ち、ヒーローのような存在とはかけ離れています。原作者の重松清さんは、大人になった現在こそ改善されていますが、幼少時は吃音症(どもり)で苦労されたそうです。そして主演の阿部寛さんは、吃音をリアルに演じ、主人公の持つ熱い想いを逆に抑制の効いた演技で、見る側を圧倒します。

あらすじについて

舞台はある中学校。前の学期に一人の男子生徒が起こしたいじめによる自殺未遂で校内は大きく揺れていた。その男子生徒、野口はコンビニ店の息子であり、「コンビニくん」とあだ名されるだけでなく、クラスメイトから要求された店の品物を親に黙って持ち出して渡す、ということを繰り返していた。耐え切れなくなった彼は自殺を図り、その遺書には、「僕を殺した犯人」の名前が書かれてあったが公表されることはなかった。両親は店を畳み、一家は引越しをする。マスコミは騒ぎ、教師たちはお決まりの「生徒指導」を強化し、担任は休職した。

新学期になり、村内という臨時教師が着任してくる。村内の挨拶にクラスは驚き、嘲笑する。彼は極度の吃音だった。しかし村内は平然とクラスを見回し、「忘れるなんて卑怯だな」と言うと、野口の机と椅子を教室へ戻すことを命じて、誰もいないその席に向かって毎朝声を掛ける。「野口君、おはよう」。その行為は、ないことにした記憶を呼び戻す。一刻も早く事件を忘れようとしていた教師や、その指導に従ってきた生徒と保護者たちは激しく動揺する。けれども村内はその行為をやめようとしなかった。村内は決してこうしろ、ああしろとは言わないが、多感な少年たちには彼の本気が伝わる。村内は、どもりながら言う。「本気の言葉」は「本気で聞く」。

少年たちは考える。野口君はへらへら笑っていたけど本当は助けて欲しかったんじゃないだろうか。この事件のことは、ずっと忘れないで考え続けていくことが大事なんじゃないだろうか・・・。

対談について

お二人はそれぞれのお立場を通して、現在の学校や生徒について感じていることを率直にお話いただきました。折出さんは教師の育成をしている中で、現実における学校の閉鎖性を認めつつ、その中にも変わっていく可能性があることや、「まっとうな学校づくり」の後押しこそ市民の力を発揮すべきであると主張されました。また、教師へは一人で悩まないでと現場を知り尽くしている先生ならではの温かい励ましもありました。



杉浦さんは、弁護士として学校を外部から見ている中で、子どもが学校の中に居場所を見つけることができるとしたら、自分の話を聞いてくれる先生がいてくれるとき。組織を変えようとしなくても、自分にできることをやるだけで点と点がつながって(居場所ができて)人は生きていけるという言葉が印象的でした。

会場のアンケートから

当日参加者は 251 名で、そのうち会員は 54 名、会員外は 197 名でした。名古屋市内での映画館での上映が終了してから広報をしなければならぬ関係で、広報に残された時間は 2 ヶ月を切っていました。時期的に受験の最中でもあるので、子どもたちへの広報は諦め、先生や PTA を中心にチラシを配布しました。メールでの受付では、吃音の会やいじめをなくす NPO からの問い合わせもあり、世間の広さを知らされました。

アンケートには感想をびっしり書き込んでいただき、正直びっくりしました。それだけ参加者の魂を揺さぶった映画だったのだと思います。また、多くの市民が日頃からいじめや学校教育について深く考えていることがアンケートからうかがわれ、その関心の高さにも驚きました。

アンケートの中から、少しだけご紹介します。

- ・多くの保護者、生徒、教育関係者に見てもらいたい(多数)。
- ・子どもたちが不安定な心を抱えて学校という生活の場で生き抜いていることに対して大人たちは無力だ。無力なら無力だと自覚して謙虚に子どもと向かい合えばいいのに上から空しい言葉を吐くだけでは・・・。
- ・いじめの加害者の責任の取り方がわかった。村内先生の静かでゆるぎない姿勢に共感した。
- ・人間は皆、弱いものだから頑張って生きていく。強くなろうとしなくてよいところが印象に残った。
- ・人との出会いというものは大事だと思った。私もあの野口君のような立場に絶対にならないとはいえない。
- ・いじめられた方はずっと心に残るのに、いじめてる方は悔やむ機会や心に残ることってそんなにないと思う。それっておかしいな。
- ・学校があまりにも自分たちを保護し、残された生徒を保護している現状を描いていると思った。
- ・子ども自身が悩み、考え、動き出すことに寄り添い、待つ忍耐が自分にあるだろうか？
- ・野口君が転校してまだどこかで生きているという物語でよかった。
- ・教師の立場も苦しいところがあるのを理解して欲しい。
- ・疲弊しているのは子どもや教師だけではない。普通の会社員、普通の主婦。世の中厳しくなっている。
- ・学校を諦めないことが大事だと思った。
- ・中学の教員をしています現場はそんなにひどくないです、同僚も温かいと思う。
- ・子どもには助け合いなさいと言いつつ教員同士助け合っていないで子どもにそれが伝わっている。
- ・いじめを単なる社会現象としか捉えてなくて、本気に考えていなかった自分を反省した。